

人間の営みとは切り離せない 宗教というものを理解する

今日はビジネスに対する二つの視点をお話しします。一つは会社という組織の位置づけの問題。もう一つは、特にグローバルビジネスを展開する上で、外へ視点を向けたときの宗教との接点です。

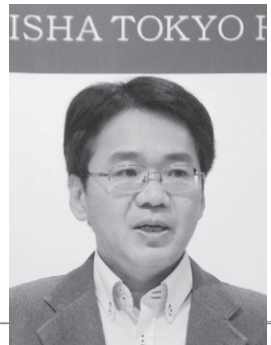
― 会社は組織として一定の歴史を持っています。しかし今は非常に変化の激しい時代ですし、どの領域においても栄枯盛衰があります。そういう点で言うと、企業が形を変えながらも存続していくことはチャレンジングな課題です。しかし企業でも文明でも王国でも、長らえることがいかに難しいかを歴史は教えています。人類が生み出した組織の中で、最も長い生命を持つものの一つが宗教組織です。宗教は問題を抱えながらも、仏教であれば優に二千年以上、キリスト教も二千年、イスラムは千年を超える歴史を持っています。人類史的に見ても最も長く存続している組織としての宗教が、なぜそのような生命力を持っているかを考えることには、組織運営の点でも意味があるでしょう。

レクチャー

同志社講座 in Tokyo 2015 秋学期

特別講座「ビジネスパーソンのための宗教入門」

大学神学部教授・良心学研究センター長 こ ほんら かつ ひろ
小原克博



組織を持続させる仕組みを見てみます。どのような組織も大きくなればなるほど、固定化したり悪弊が出てきたりします。それを思い切って改革するタイミングがあります。いま世界宗教と呼ばれているものは、ほぼ例外なく大きな改革を行い、新陳代謝をしながら再活性化し存続しています。キリスト教は16世紀に宗教改革を行い、積もり積もっていたさまざまな問題に対し、かなりラディカルな改革を行いました。中国・朝鮮半島経由で日本にもたらされた仏教は、鎌倉時代になると日本的なものに刷新され、新たな息吹を吹き込まれました。浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などがそうです。そういう宗教が持ってきた持続性と内的な改革の力、そして社会に向かう利他性は、ビジネスの世界にも何かヒントを与えるかもしれません。

宗教は人類史とほぼ同じ長さの歴史を持っています。「死んだらどうなるんだろう」と人が考えること、つまり広い意味での宗教性は、まさに人類と同じくらしい歴史を持っています。参考として、フランシス・フクヤマというアメリカの有名な政治学者の、比較的最近の本から

一節を抜き出します。「宗教を抜きにして、人類が小さな群れに過ぎなかった社会を超えていかに発展していったのかを理解することは不可能だ」（『政治の起源』上）。ネアンデルタール人とは違う形で進化してきた人類が、かなり初期の頃から宗教的な儀礼に関わってきたことは考古学的に分かっています。その小さな群れに過ぎなかった集団が、宗教儀礼などをよりどころに組織化される中で、より高度で複雑な行動をとれるようになっていきます。これには良い面もあれば悪い面もありましたが、いずれにしても人間は何か超越的なものに対して祈願し続けてきました。ひと昔前、農耕社会では雨が降らなければ、一族郎党飢え渴いて死んでしまいました。日照りのときの降雨祈願は、洋の東西を問わず非常に切実なものでした。

祈願することによって環境に作用を及ぼすという発想が、原初的な宗教の中にすでに見られます。他の動物に見られない、人間独特の行動です。どの生物も環境に適応して生きています。しかし、環境そのものに作用して自分たちの運命を改変していかうという動機付けを持っています。

いまヨーロッパは世俗化しています。キリスト教の影響力はかつてほど強くありません。ただアクティブな信者の数がヨーロッパで激減している一方で、キリスト教徒は他の地域で増えています。世界のキリスト教徒の過半数は非西洋圏にいます。キリスト教の成長点が移動しているのです。人口だけを見ればキリスト教はもはや西洋の宗教ではなく、むしろアジアやアフリカ、ラテンアメリカで成長していることを知っておく必要があります。

イスラム世界、特に中東と日本は、石油を中心に非常に密接な経済関係を持っています。イスラムはビジネスとの関係が非常に強い宗教です。預言者モハンマド自身、アラビア半島を駆け巡っていた商人だったので、商売に関わる伝統がイスラムの中には引き継がれているのです。ビジネスそのものを嫌悪するような伝統は、イスラムにはまったくありません。重要なのは、得たものや持っているものを、それを必要としている人にきちんと施すことです。こういうことがコーランに規定されていて、「施し」は義務とされています。

いる動物は、人間だけなんです。もっと簡単に言うと、人と動物を分ける一つの点が宗教の有無なのです。

一 神教徒の価値観を知る

次に今日の本題、ビジネスに対する外的な視点と宗教の関係をお話しします。世界経済に影響を与えているグローバル・アクターとしての宗教に対する理解は、場合によってはビジネスに直結するテーマです。代表的なものとして、今日は3つの宗教を簡単に取り上げます。ユダヤ教、キリスト教、イスラムです。ユダヤ教人口は1400万人と、かつてはヨーロッパは1400万人と、かつてはヨーロッパ全域にユダヤ人居住区がありましたが、第2次世界大戦下のホロコーストの結果、ヨーロッパからユダヤ人は激減し、現在は大半がアメリカ合衆国とイスラエルに住んでいます。金融業をはじめ、ビジネスの世界においてユダヤ人が占める影響力には今なお大きなものがあります。スターバックスなど、グローバル企業が多くがユダヤ系資本で運営されています。キリスト教やイスラムの世界では、利子をつける、あるいは利子を取ってお金を

を貸し借りすることが禁じられていました。そこで、そういう良くない仕事をユダヤ人たちに押し付けていました。このように、高利貸しや金融業がユダヤ人と結びつきやすかった歴史がヨーロッパにはあるのです。しかし、お金を貸すほうは富を収奪しているかのようなイメージで見られます。結果的にそういうイメージの蓄積が、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義、ユダヤ人への差別へとつながってしまいました。

22億人の信徒をかかえるキリスト教は、人口では世界ナンバーワンの宗教です。日本ではクリスチャン人口は1%未満ですが、世界に出ると3人に1人がクリスチャンです。ビジネスの世界でも当然、一定の影響があります。とりわけ資本主義とキリスト教世界との関係については、これまでマックス・ウェーバーをはじめ、さまざまな研究が世に出してきました。資本主義がなぜアジアではなく、ラテンアメリカでもなく、西ヨーロッパで誕生したのか。この必然性を論じるには産業革命、科学革命など、ヨーロッパにおける変化をひも解いていく必要がありますが、その精神的土台となっているの

参考までに言うと、ムスリム人口の増加率はキリスト教を上回ります。これは出生率の違いが大きいです。現在の人口推移が継続されれば、2070年頃には人口的にはキリスト教を抜き、イスラムは世界第1位の宗教になるであろうと言われています。現在キリスト教とイスラムの信者を合わせると、世界人口の半数を超えます。彼ら・彼女らの論理や価値観を知らずしては、国際社会を知ることができません。日本では、宗教に関心を払わなくても日常的に困ることはありませんが、一神教の世界では価値観の根底に宗教があります。相手が大切だと思っている価値観を理解し、それを尊ぶ気持ちや姿勢を示すだけで、良好な人間関係をスタートできると思います。

外国人労働者の位置づけ

世界の宗教を見ると、異質な他者を理解するという視点は大切です。実際には難しいのですが、いかに難しいかを知ることを含め、宗教についての理解を持つと、私たちは今とは違う環境を構築でき

きるかもしれません。今後日本が現在と同じ経済レベルを維持し、さらに少子高齢化社会を支えていくためには、さまざまな分野で外国人労働者の手助けが必要になってきます。政府もその後押しをしています。これまで多かった外国人労働者は、ブラジル、フィリピンからでした。今はインドネシア、マレーシアからも増えています。ブラジル、フィリピンはカトリックが背景にあり、インドネシア、マレーシアはイスラムです。日本にいる外国人労働者の多くは工場労働し、近くには居住エリアができています。多様な背景をもった外国人が身近にきているのに、十分にそれが見えていない現状が日本にはあります。今後、日本経済を支えていく外国人労働者の位置づけは、日本社会でまだ十分に議論されていません。まだ「労働者」という位置づけでしかありません。彼ら・彼女らの固有の価値観は尊重されているとは言えないでしょう。たとえば、ムスリムの労働者に対し、日に5回の祈りを保証している病院、福祉施設、会社はまだ少数です。「郷に入れば郷に従え」という論理だけで突っぱねては、おそろく溝は埋ま

らないでしょう。これらの潜在的な問題が深刻化する前にきちんと彼らの価値観を理解し、単なる労働力ではなく、人として付き合っていく視点を持たなければ、現在ヨーロッパが抱えているのと同じような問題を将来の日本が抱えることになりかねません。

以前からヨーロッパにはたくさんの方々がいます。多くはムスリム移民です。ドイツであれば高度成長期の1960年代、労働力不足を補うためにトルコから大量の労働者を迎え入れました。フランスの場合には、旧植民地の北アフリカ諸国からたくさんの方々が来ています。いずれもムスリムです。ヨーロッパ社会は彼らを、いずれは帰国する一時的な労働力としてしか見ていませんでした。しかし彼らは家族を呼び寄せ、今では2世、3世と代を重ね、人口もかなり多くなってきています。言うまでもなく、ヨーロッパにおける第2の宗教はイスラムですが、ヨーロッパ諸国で移民の社会統合がうまくいかなかった時、多くの問題が生じました。そして同じ労働者がまったく違う見方をされるようになった重大な

ターニングポイントがあります。9・11です。

ドイツにおいてトルコ人はゲストワーカーとして見られていました。ところが9・11以降、同じトルコ人が突如として「ムスリム」として見られるようになりました。社会から付与されるアイデンティティが大きく変化したということです。ホスト社会からすれば、自分たちのすぐそばにムスリムがいる、彼らは危ない存在なのではないかという疑心暗鬼が高まってきました。その延長線上で今、難民や移民問題でヨーロッパ諸国は苦慮しています。成功例は残念ながらほとんどありません。こういう教訓を学んだ上で今後我々は、多様な外国人労働者とのように向き合っていくべきかを考えていなければなりません。

宗教理解を深める必要性

日本人の宗教理解に関して言うと、かなりステレオタイプ化された言説が繰り返されてきました。たとえば「ユダヤ教、キリスト教、イスラムは唯一の神を信じる宗教であるから、対立、衝突を避けることはできない」。「一神教は排他的、独

善的、好戦的、自然破壊的であるのに対して、日本に根付くような多神教は寛容で協調的で友好的で、自然と共生できる」。こういう二元論的な分け方をした上で、一神教は戦争ばかりしているが、日本の多神教文化は異なる価値観を認め合う優れたシステムだから、これからは多神教の時代なのだ。

そう聞くと、我々は何となく納得しやすいです。しかし他者を蔑んで自尊心を高めるやり方は、私は健全な自己理解ではないと思います。これでは他者と、まともな対話はできません。この問題はザビエルの時代から繰り返されています。徳川幕府にとってキリスト教は理解し難い教え、典型的な邪教でした。異質なものが恐怖に映り、強い排除の姿勢に出してしまう歴史を日本は持っています。これは歴史的な難問だということを自覚した上で、この課題をどう乗り越えていくかを考えていく必要があります。

日本人の宗教意識調査のうち、比較的新しいものを朝日新聞から取り上げてみます。「神仏は信じない」という回答が4割、「神頼みしたい」ことがありますが「か」という問いに対しては「はい」が75

%。神頼みはするけれど特定の宗教は信じないというのが、日本の実情だと思えます。つまり、ご利益信仰が日本人の宗教意識の中心なんです。神仏を信じない理由として「科学的でないから」という意見もあります。いずれ科学が進歩してすべてを説明してくれるようになれば、宗教は無くなるという人もいます。ところが実際にはそうなっていないどころか、1980年代以降、宗教復興運動が世界の各地で起こり、現在に至っています。宗教は無くなりません。なぜか。宗教は人間の歴史と同じく長い長きを持っていると言いました。動物は自分の死期を悟りますが、人間のように、死んだらどうなるのだろうかという心配はしません。死や死後を心配するのは人間だけです。人間は脳皮質が非常に発達し、その機能の一部に、自分の行いの結果を類推する能力が入っています。この力によって人間は複雑で計画な行動ができると同様に、先々の様々な心配をしまいませう人間である以上、避けがたく付きまとう宗教的な問いから逃げるのではなく、どこかで向き合っていく覚悟を決めたほうがよいのではないかと思います。

オウム真理教事件以降の日本における宗教イメージ

私たちが他者を理解しようとすることはもちろん大事ですが、同時に私たちが「どう見られているか」を踏まえて、コミュニケーションを取ることも極めて大切です。まず世界の多くの人は、日本の宗教は仏教や神道らしい、といった程度の非常に曖昧な知識しか持っていない。しかし世界から日本と宗教を見たとき、しばしば挙げられるのが1995年のオウム真理教事件です。宗教テロのうち、オウムの地下鉄サリン事件は別格のものとして残っています。

それ以前、テロと言えば、ハイジャックなど、基本的には政治的な動機付けを持ったものが圧倒的に多かったのです。しかし宗教的な動機付けでテロが起こり得ることを、地下鉄サリン事件は世界に示しました。しかも弁護士、化学者、医者など、いわば日本の最高の教育を受けた人たちが反社会的行動に関与しました。この事件には、日本社会の抱える問題が反映されていたことを、20年経った今、あらためて考える必要があります。

この事件以降、日本において宗教に対するイメージはかなり変わりました。それまでもポジティブなものではなかったのですが、この事件によって、宗教は危ない、怪しいというイメージが拡大しました。こうした中でその6年後、9・11同時多発テロ事件が起きました。イスラムという、日本人がまだよく知らない宗教が非常に暴力的なことをやった、やはり宗教はどれも危険なものだという、非常にネガティブな宗教イメージが日本社会で続くことになったのです。

バイアスが強くなければなるほど、私たちが宗教を客観的に理解することは難しくなっています。現在、過激なイスラム集団によるテロ事件が続く中で、私たちがメディアを通じて知る宗教の情報は、まさに危ないことばかりです。私たちはニュースが伝える情報に過剰に影響されがちです。ムスリムの圧倒的多数は極めて寛容で平和な人たちですが、そうした人たちの日常はニュースになりません。宗教に対する見方をリセットするのは簡単ではありませんが、全体像を理解するために、メディアの特性は理解しておく必要があります。

中東から見た日本

中東、イスラム世界から日本はどう見られてきたのでしょうか。トルコを含めた中東は、おそらく日本人が想像する以上に、日本を高く評価しています。ある種の尊敬の念、憧れを持って見ている場合が多いです。

日本が一神教の国でないことは知られています。ムスリムにとって一神教以外の宗教は、しばしば「文化」のカテゴリに入られます。仏教も神道も、人間の文化的な営みとしては尊重するが、一神教とは同格ではないというのが、彼らの平均的な理解です。それを一神教中心の宗教理解だと批判することは簡単です



が、少なくとも、こうした実情を知っておくことは大切です。

日本のさまざまな宗教は、彼らの言葉で言うと「偶像崇拜」の宗教です。偶像はムスリムにとつては拜んではならないものです。また、ラディカルな人にとつて偶像は破壊すべき対象です。タリバンによるバミヤンの仏像破壊や、いわゆる「イスラム国」による世界遺産の破壊は、彼ら独自の論理に立った偶像破壊行為です。もちろん多くのムスリムはこれを支持しません。

中東が日本を尊敬する理由としては、日本には「平和の国」というイメージがあること、日本社会には宗教的な寛容性があること、そして日本を近代化のモデルとして見ていることなどを挙げることでできます。日本のように経済発展したいと、多くの国が思っています。近代において急速に国力を高めた東の小国がアメリカと戦い、最終的には負けたという歴史はよく知られているだけでなく、彼らが日本に共感する源泉ともなっています。なぜなら、彼ら今もなお、アメリカの軍事的支配の中で苦しんでいるからです。イラク戦争はその典型です。罪のな

い一般市民が巻き込まれ、たくさんの方が奪われました。欧米の軍事介入によって多くの命が奪われている状況は今も続いています。敗戦の廃墟の中から立ち上がり、奇跡的な経済復興を遂げた国として、日本に対し、彼らは特別な憧れと共感の眼差しを向けています。

ところが日本社会はそういう思いを普段は受け止めていません。お金をあげるから石油をくれという、即物的な関係だけが続いてきました。しかし日本は、欧米諸国が到底持つことができないような信頼関係を築くポテンシャルを有しています。へたに「テロに対する戦い」に首を突っ込むより、少なくとも中東における日本の平和的な中立性を維持することの方が大事です。

東アジアから見た日本 海外神社と靖国問題

東アジアから見た場合、事情はかなり変わってきます。中国、韓国、日本の間の緊張関係はまさに、「どう見られているか」という問題と直接関係があります。日本がアジア諸国を支配し植民地化した時、現地の人々の懐柔政策として、海外

神社が何百と造られました。そこで現地の人々の多くは参拝を強要されました。だから「日本は多神教だから寛容だ」などというイメージは彼らにはまったく無く、強要されたネガティブな記憶が今も残っています。日本の敗戦が伝わるやいなや、海外神社のほとんどが破壊されました。それだけ神社が支配のシンボルだったということです。宗教が支配に使われた歴史です。もちろん、国策の中で、全国の神社が強制的に整理統合され、道具的に使われたという意味では神社も犠牲者としての側面を有しており、近代の国家神道と古来の神道とを区別する必要はあります。

今なお厄介なのは靖国問題です。戦時下の記憶とセットになって靖国神社は、中国や韓国の人々の脳裏に焼き付いています。この問題を先送りせず、どこかできちんと整理しないと、東アジアにおける隣国関係を前進させることは難しいでしょう。

宗教的背景にとらわれない 「個人を見る」力を養う

宗教的アイデンティティをめぐる課題

をお話ししてきました。併せて大事なことは、宗教的価値には多様性があることです。キリスト教徒やムスリムの間でも、かなり考え方に幅があります。ムスリムは寛容だという話をしましたが、非常に厳格な人たちがいることも事実です。ムスリムを一括りにしないで、一人ひとりと付き合う中で、どの程度宗教的なことを大事にしているのかを確認することが大切です。

多様性の幅、価値の振れ幅が最も大きい宗教は、おそらくキリスト教です。保守的な考え方の人からリベラルな人までかなりの幅があります。そして「欧米」とひとくくりにできないくらい、アメリカは例外的に非常に宗教的な国です。州知事選挙や大統領選挙に宗教勢力が影響を与える場合もあります。価値の対立として長らく問題になってきたのは中絶と同性婚です。しかし2015年6月に連邦最高裁が同性婚を公式に認め、同性愛をめぐる議論は転換点を迎えています。このような価値の多様性を視野に入れておかなければなりません。キリスト教徒だから、ムスリムだからこうだろうという思い込みはしないほうが無難です。ま

さに「人を見る力」が必要となってきました。アジアで初めてノーベル経済学賞を受けたアマルティア・センの『アイデンティティと暴力』という本から引用すると、「人間にはいろんなアイデンティティがあるにもかかわらず、文明の友好とか宗教間の対話とか、そういう観点から見れば、平和を模索する以前に人間が矮小化されることになる」。宗教的価値は大事ですが、そういう視点からだけ人間を見ると、その人が持っている多様なアイデンティティを矮小化してしまうことになるだろうと彼は言っています。

宗教を理解することは大事だと、私は言いました。同時に、人をムスリムやキリスト教という枠にはめて考えることから距離を置くこともポイントの一つです。背景を意識しながらも、その人自身を見ていくことを大事にすれば、人間そのものを、より全体的に見る道を見出すことができると思います。

(11月6日、同志社大学東京オフィス)